

天然アワビ稚貝の生息場造成手法に関するガイドラインの作成



【研究課題名】

農林水産技術会議プロジェクト研究「生態系ネットワーク修復による持続的な沿岸漁業生産技術の開発」

【実施年度】平成25～29年度

資源研究センター 沿岸資源・生態系グループ

澤山周平・黒木洋明

■目的

クロアワビやメガイアワビなどの漁獲量は長らく低迷しており、「磯焼け」と呼ばれる現象により餌となる海藻が減っていることの影響が大きいと考えられています。さらに、われわれが横須賀庁舎周辺で実施した調査から、稚貝の生息場と成貝の生息場の間の空間的な隔たりによって、海藻を食べようになる時期の稚貝の生き残りが悪くなり、産卵できる成貝まで成長できないことが分かりました。そこで、天然アワビの再生産力を高めることを目指し、成貝生息場と連結した場所に稚貝生息場を造成するための技術開発を行いました。

■方法と結果

三浦半島西岸において稚貝と成貝それぞれの生息場の分布を把握し、荒崎近くのアワビ保護区内の成貝生息場と連結した地点に稚貝生息場の造成試験区を設定しました。2016年秋、地元漁業者との協同で小型の御影石およそ1,400個を対象地に投入しました（図1）。この造成試験区でモニタリング調査を行った結果、2017年春には2016年生まれの天然アワビ稚貝が出現し、夏頃まで順調に成長したことが確認されました（図2）。同試験区では2018年春にも2017年生まれの稚貝が多数見つかると、良好な稚貝生息場の機能が維持されていました。

■波及効果

得られた成果よりアワビ稚貝の生息場造成手法と調査手法に関するガイドラインをまとめました。天然アワビの再生産力を活用する

手法は、種苗放流や大規模な漁場造成といった従来の資源増殖策に比べ低いコストと労力で実施可能で、小規模経営体が行う新たな方策として期待できます。今回の試験では、造成試験区において夏以降に餌不足による成長停滞が見られました。今後、磯焼けへの対策と組み合わせて餌不足を解消するなど、より効果的な実施方法について検討を進めることが重要です。



図1 造成直後（左）と4か月後（右）の転石帯の様子。右の写真では転石の表面に無節サンゴモや付着珪藻が生え、アワビ稚貝にとって好適な生息環境が形成されている

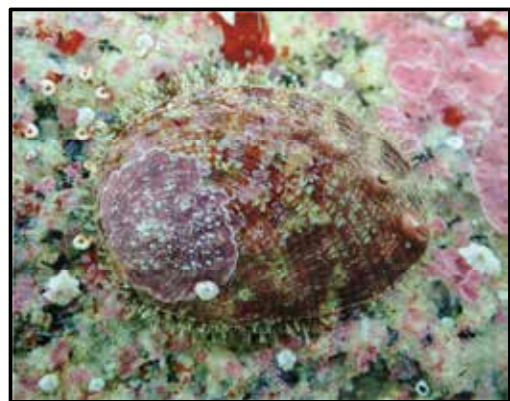


図2 2017年6月に造成試験区で発見した天然のメガイアワビ稚貝（殻長約20mm）